

暮らしと健康の月刊誌

ケア

7 2016
July



特集

- 嚥下調整食 ● 便秘
- 長引くせきに要注意 ● 食中毒
- 児童虐待の早期発見に向けて



患者さんに納得して治療を受けてもらいたい体外受精コーディネーターの役割



神谷レディースクリニック（中央区）
看護師長 浅野 明恵さん

1998年、当時では珍しい不妊治療専門クリニックとして開院した同クリニックにオープン時から勤務、看護師長を務める。

「前職では助産師として周産期医療に関わり、分娩の介助などを行っていました。不妊治療に関する情報が少なく、当初は勉強をしつつオープン準備をし、九州の不妊治療専門のクリニックに見学も行きました。体外受精コーディネーターについて知ったのもこのときでした」。

不妊カウンセラーと体外受精コーディネーターは日本不妊カウンセリング学会の認定資格。不妊症に関わる看護師の資格としては日本看護協会の認定看護師制度の分野の中に不妊症看護があり、浅野さんは両方を取得している。

「クリニックを訪れる患者さんは1日約250人。以前は40歳以上の方が多かったですが、ここ1、2年で卵子の老化に関する話題が注目され、一般にも認知されたことで30代の患者さんも増えています。市による特定不妊治療費助成

にも年齢制限があるため、早い段階で受診をして、短期間に集中して治療を行う方もいらっしゃいます」。

同クリニックの体外受精コーディネーターは、不妊カウンセリングや週に1度の体外受精教室、2週間に1度の不妊症教室も開催。

「悩んでいる患者さんに最新で適切な情報を提供して治療を選択できるようサポートするのが体外受精コーディネーターの役割です。患者さんには夫婦で納得して後悔せずに治療を選択して頂きたいので、気持ちの整理に役立てばと思います」。

秋ごろには妊活教室を企画しており、一般の方にも幅広く妊娠について興味を持ってもらいたいという。



帯広第一病院（帯広市）
総務課 濱田 力範さん

今年3月に開催された十勝大平原クロスカントリースキー大会・42キロ60歳以上の部門で大会4連勝を果たした。前年より約3分

十勝大平原クロスカントリースキー大会で4連勝

イムを縮め、2位とは約19分の差をつけての圧勝。慎重なワックス選びも勝因となった。今年で63歳になる濱田さん、普段は同病院総務課の施設担当職員。競技歴は意外にも浅く、始めてまだ10年。だが根っからのスポーツ好きだ。「ジョギングやマラソンをして

暮らしと健康の月刊誌ケア 2016・7月号

いたが、膝と腰を悪くした。負担のかからない運動をと5代から自転車競技に取り組みむようになった。が、濱田さんの参加する自転車レースの過酷さは並ではない。上富良野から十勝岳温泉を走破するツール・ド・北海道のヒルクライムは、標高差1千メートルの坂道20キロをひたすら上り続ける耐久レース。これはほんの一例

で、他のレースの年代別部門でも優勝や上位入賞を重ね、「冬場なら膝と腰に負担のかからないスキーにも挑戦できるのでは」と考えたことがクロスカントリースキーを始めるきっかけ。トレーニングを兼ね、冬場は歩き、夏場は自転車通勤。自転車は遠回りをして片道10キロを走る。大会シーズンは全道を縦断。85キ

ロを走破するという勇払原野クロスカントリースキー大会でも、総合13位という好成績を得た。どれだけレースが過酷でも翌日は通常通り出勤する。「体の中身を鍛えることはできないが、外側は鍛えることができる」。そう語りながら、高齢でも膝に負担のかからない自転車やスキーを勧める。来年の目標は5連勝だ。

地域にいかに関与できるかを模索。訪問リハビリを積極的に推進



定山溪病院（南区）
院長 菅原 啓さん

今年4月、副院長から院長に昇任。同病院はこれまで抑制廃止をはじめ、終末期医療や褥瘡の予防・治療の取り組みを推進してきた実績のある慢性期医療機関。慢性期医療とは急性期の治療後、さらに継続的な医療やリハビリ、看護、介護を提供する医療。地域で継ぎ目のない医療連携を支える役割もあり、日本慢性期医療協会副会長を務める中川翼副院長（現名誉院長）のもと、そのモデル病院を目指し推進しており、今後も踏襲、発展させていく方針だ。

一方、「超高齢化を背景に医療機関も変革を余儀なくされる時代。地域包括ケアシステムの構築も視野に、いかに地域に貢献できるかを模索したい」と話す。職員の声にも耳を傾けていこうと、若手の役職者を中心に意見反映の場を設けるという。リハビリ提供も大きな柱で、訪問リハビリも積極的に展開。リハビリテーション部総勢約75人体制というスタッフは、培った技術を地域や在宅でも反映し、高い評価を得ている。院長自ら訪問診療も行い、在宅・地域医療の重要性を深く実感。今後は訪問リハビリをさらに推進するため、スタッフ増員やサテライトの開設も検討予定。住民がより利用しやすいよう午後の外来診療も開始。一定山溪と聞くと札幌市内から「遠い」というイメージを持つご家族もいるが、道路の複線化が進み交通の利便性は良くなっています。当院は長期療養を必要とされる中、責任を持ってお預かりしている。毎日お見舞いが必要とは考えず、安心して任せて頂ければ」とアピール。地域の中で後方支援の意味合いだけでなく、頼られる存在として位置づけたいと展望する。

